

コロナ禍と風流

Influence of COVID-19 crisis on the FURYU

大 森 重 宜（金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科教授）

Shigenori OHMORI (Faculty of Human Sciences, Department of Sports Science, Professor)

田 島 良 輝（大阪経済大学人間科学部人間学科准教授）

Yoshiteru TAJIMA (Faculty of Human Sciences, Department of Human Sciences, Associate Professor)

〈要旨〉

風流^{ふりゅう}とは祭りで趣向を凝らした作り物に発し、さまざまに飾り立てた作り物、これに伴う音楽、舞踊などを指す。特に田楽や疫神の祭に伴う風流の流行後は、山や鉦を飾り立て、囃子をはやし練歩く祭礼の風流が盛んとなり、室町時代末から近世初期にかけては小歌をうたって踊る群舞が各地で流行した。本稿では現代の疫癘新型コロナが風流に及ぼした実態を明らかにするため能登半島の風流を対象に調査報告を行う。日本遺産に認定されたキリコ祭りやUNESCO無形文化遺産に登録された青柏祭の曳山行事は、高度経済成長期に文化化、観光化、健全化することにより維持継承されてきた。しかし同時に公の関与は風流の自由度を失い、みやびと思いつきという本質は変化しつつある。コロナ禍が過疎化により衰退する能登の風流に及ぼす影響を検討するために調査した結果、2021年、2020年は神事のみが縮小化されて執行されたが、風流は中止される傾向が続いている。

〈キーワード〉

風流^{ふりゅう}、コロナ禍、能登の祭り

1 問題の所在

2020年、新型コロナウイルスの流行により全国の伝統的祭の神賑わいのほとんどが中止、延期、あるいは縮小され、さらに2021年もこの傾向が続いている。本稿ではこの祭の神賑わいの中止、延期を風流^{ふりゅう}の観点から祭りの維持継承と意義について検討するため、データ収集と現況の把握を目的とする。

「風流^{ふりゅう}」とは趣向を凝らした作り物に発し、さまざまに飾り立てた作り物、これに伴う音楽、舞踊などを指す。風流の文字は古く「みやび」と訓じ、みやびやかなもの、風情に富んだものを意味したが、平安時代には和歌や物語を意匠化した作り物をさすようになり、祭礼の際の傘、山、鉦などが風流と呼ばれ、これに付随した仮装の練り物、囃子、踊りまがが含まれるようになった。特に田楽⁽¹⁾や疫神の祭に伴う風流の流行後は、山や鉦を飾り立て、囃子をはやし練歩く祭礼の風流が盛んとなる。室町時代末から近世初期にかけては小歌をうたって踊る群舞が各地で流行し、それらは今日まで特色ある民俗芸能として全国に伝承されている。

伝統的祭礼の中心は神輿の渡御、これを賑わす風流であった。神賑わいとしての風流は産業構造の変化など社会環

境に影響を受け、構造、機能、意義が変化し、衰退、消滅、あるいは興隆してきた。例えば高度成長期前期には多くの祭礼に衰退や中断、重要な変更がみられ、後期には復興・発展する。前期の衰退には、経済効率第一の風潮のほか新生活運動⁽²⁾が関与した可能性がある。後期の復興は石油ショック以後の安定成長期の「文化の時代」に、祭礼が文化として扱われ、文化財指定を受ける「文化化」、祭礼が観光資源になる「観光化」、事故のない祭礼を目指す「健全化」などの特徴が見られる。〔国立歴史民俗博物館研究報告〕さらに行政などが関与し予算を立案、業務として運営することにより祭りは文化の時代に文化財としての性格を強め、観光資源となって公的資金が財源となる健全化が進むこととなったのである。

今般の新型コロナの流行により祭礼の風流が中止、延期されたことはアフターコロナの祭礼、風流にどのような影響を及ぼすことになるのであろうか。日本財団と一般社団法人マツリズムの海の祭りの調査報告「日時：2021年2月27日～3月1日、方法：インターネット、対象：全国20～60代の男女、性年代均等割付、800名（海の祭りが想起される地域400名、それ以外400名）」によれば、コロナ禍以

前に祭りに参加していた人のうち92.5%が不参加となり、不参加の理由を90.7%がコロナの影響としている。さらにコロナ化で失われる可能性が高いと考えられる日本の文化の1位が祭り（42.3%）、2位花火大会（32.8%）であると報告している。またこの調査では、祭りはなくなってしまうものだと思う割合が71%（そう思う28.5%、ややそう思う42.5%）であった。この調査対象者の中で祭りへの参加経験者は24%であり、経験がない人を含めて祭りを継続すべきであると答えており、祭りの開催危機が考えられる中、なくなってしまうものだと思う割合が比較的高かったと考えられる。この背景には高度経済成長時代に祭りが「文化」「観光資源」「健全化」され、祭りが文化と認識された背景があると思われる。しかし反面、高度経済成長後期の祭りの性格の変容は資金をはじめとする自由度の喪失につながっている。文化としての風流は観光資源としての機能と意義を持ち、故に公的資金を資金源とするため健全性が求められるのである。

能登半島の代表的風流は、日本遺産キリコ祭り群、日本最大の山鉦が曳行されるUNESCO無形文化遺産青柏祭の曳山行事、国無形文化遺産お熊甲祭りの旗竿祭などがある。主にこの三つの祭りにおける風流が基となり、風流が伝播したと考えられている。これらはそれぞれ文化の時代に公の支援を得て文化財化、観光資源として観光化、そして組織が健全化、あるいは約縁集団化⁽³⁾することによって継承されている。祭は観光的人流が多く、人々の密集と深い交流は必然となる。能登半島においても2020年以降コロナの流行によりすべてが中止となった。2020年以前においても地域の過疎化、少子化に伴う祭り行事の中断、消滅の傾向にあるこの地域にコロナ禍が及ぼす影響についてその実態を継続的に調査する必要がある。

2 祭りと風流

2-1 風流のはじまり

現代の代表的風流は山・鉦・屋台行事とこれを囃す歌舞であるといえよう。山・鉦・屋台行事は全国で1500件（現在は1300件の減少）に及び、その起源は京都の祇園祭の山鉦である。祇園祭は863（貞観5）年五月二十日疫病の流行を鎮めるため朝廷により御霊会を神泉苑で行われたことに始まる。御霊会は崇る神を祀る複合的信仰に基づく国家祭祀であった。従って毎年行われる性格のものではない。三代実録⁽⁴⁾によれば、祭場に国に広がる疫神を現す66本の矛が立ち、早良親王（崇道天皇）以下六人の霊坐を設け經典を講じ、童舞、舞楽、散楽雑技などが演じられた。869（貞観11）年の祇園社本縁録に「天下大疫の時、宝祚隆永、人民安全、疫病消除鎮護のため卜部日良麻呂勅を奉じ、六月七日六十六本の矛を建てる。長さ二丈許、同十四日洛中男児及び郊外

百姓を率いて神輿を神泉苑に送って祭る。是を祇園御霊会と号す。爾来毎歳六月七日、十四日を恒例と成す」とあり、疫神の依代を奉じて賑やかに境界に送り出すことが描写されている。御霊とはこの世に怨みを残したものの怨霊であり、人口の集中した都市における必然ともいえる疫病の流行を抑えるため、その祟りを鎮めて境域の外へ送そうとした行事であった。祇園祭はこの祇園御霊会が継承され例祭化した八坂神社（祇園社）の祭りである。祇園会は還幸列が賑わいの中心であり、馬長が主役であった。還幸列は馬長（童）を先導に、四騎の乗尻、扇鉦二本、騎乗の巫女二人、王の舞に獅子舞二組、幸鉦四本、神輿三基（牛頭天王、婆利采女、八王子）に巫女一騎、騎馬の田楽衆・駒形稚児・細男衆、最後に神主五人で構成されていた。その後、中世、町衆と称する商工業者が財力を蓄え、風流といわれる出し物を出すようになる。祇園会は祭事を賑わす集团的歌舞「風流拍子物」が主役となり、神輿の御旅所には雑芸者の横笛、琵琶、傀儡、猿楽などの芸能が披露されていた。祇園祭の山鉦は14世紀に始まり、町、町組など地域共同体による町衆の成長による京都の民衆の祭りとして形成され、笠鉦や仮装衆などの行列としての風流拍子物やその賑わいをもって疫神を域外に鎮め送り、災疫を免れようとしたのである。この笠鉦等の造り物が趣向を競って華美化、大型化して山鉦祭りに発展し、全国に伝播した。[植木2016]

毎日新聞（2020年6月12日）によれば2020年の祇園祭はコロナ禍に対応して前例のない祭礼の形を模索しながら、例年にも増して厳粛な神事が勤められている。山鉦は巡行せず、後祭を行う十一の山鉦保存会の代表者が、山鉦に見立てた櫓を手に、京都市三条通烏丸から下京区の四条御旅所まで徒歩で巡行した。2021年は前祭と後祭の山鉦巡行は前年と同様に行わず、代表者による四条御旅所での参拝などに縮小し、両日の神輿渡御も行われず神霊を櫓に遷す「御神霊渡御祭」に代えられた。また江戸三大祭りで隔年に開かれる神田明神の神田祭は、神事のみが行われ、浅草神社の三社祭りは、神輿を台車に乗せて各町会を巡行するなどの対応をとった。

2-2 依り代としての風流

折口信夫は山・鉦・屋台行事の起源を疫神の依代とする「依代論」を展開した。依代は祭りにおいて神を招く装置であり、三段階で構成される。第一段階は標山⁽⁵⁾、第二段階は標山の頂上の松や杉、真木などの高木、一本松や一本杉などの自然物、第三段階として「依代」または「招代」が必要となり、後に「人作りの柱・旗竿なども発明された」としている。神が降臨する場としての標山と、神が依り憑く依代・招代とを組み合わせることであり、依代・招代は樹木が原型で、後には人工物も生まれるという変化を説い

た。[折口2002：160-190] 植木行宣は、祇園祭の山鉾^{かむくら}などを神の依代であり移動式神座とする折口の論をその本質を鋭く指摘したものであるとする。文化庁はUNESCO無形文化財へ「山・鉾・屋台行事」を登録申請した要旨においても「祭に迎える神霊の依代であり、迎えた神を賑やかし慰撫する造形物である」と定義づけている。山・鉾・屋台行事は、数世紀にわたり地域が一体となり、社会の安泰や災疫防除を願い、伝統的工芸技術を駆使し、世代間交流とコミュニティーの維持継承、国際社会における文化財の保護に貢献する機能と意義を持ち、依代として神霊を迎え、神々を賑やかし慰撫する造形物であり、これの巡行を中心とした祭礼行事である。山・鉾・屋台を中心とする祭りは中世末から日本全土に影響を及ぼし、都市が広範に成立した江戸時代に多彩な山鉾の祭りが各地に生まれたのである。植木は折口の論説は意味論によって収束され、山・鉾を大嘗会における標の山、神の宿る聖なる山、依り代と説く域を出ないと指摘する。[植木2016：10]

^{あおかしわまつり}
青柏祭の曳山行事（でか山）は能登七尾が日本の五大港湾都市であった能登畠山家治世の1473（文明5）年であり、管領家であった畠山家が能登畠山として直接的に祇園祭を模して伝えたものである。その依代としての役割は、神霊を迎えて奉納することである。三台それぞれに異なる氏神の神社から、神の依代・招代としての幣束が授けられる。魚町は能登生國玉比古神社、府中町は能登國の印と鑰を神格化した印鑰神社、鍛冶町は大地主神社の幣束を授かり、それぞれの神霊を招いて曳行する。また青柏祭本儀の後には、魚町と府中町にも大地主神社から竹御幣が授けられ神霊が招かれる。さらに各町の人形飾り舞台には松の生木が立てられ、神社以外の神霊を招く依代の意味を持つ。さらに御幣、一本松の他、山鉾の名の由来となる鉾が3～5本、3体の人形が飾られ、複数の依代が立てられ疫神を招く。氏神と大地主神社の神霊を招き、神々を賑やかす役割と人形と鉾に疫神を引き受け流す疫癘攘却の二つの意味を持つのである。また3台のでか山の紋は魚町が「丸に二つ引き」、府中町の「三つ巴」、鍛冶町の「丸に山字」である。特に魚町の丸に二つ引きは、前田家の滅亡した畠山家へのレクイエムとしての意味を表す紋とされている。またキリコ祭りのキリコ・奉燈は神輿を灯をもって照らし賑わす役割と疫神を招く依り代としての意味と構造をもつのである。

3 コロナ禍の風流

3-1 青柏祭の曳山行事

青柏祭の縁起は、明治三十八年宮司日誌「大地主神社山王廿一社由緒書」（1905）年に、「養老二年（718）越前四郡ヲ割キ能登國ヲ置クニ當リ帝都ニ倣ヒ國守々護神トシテ近州日吉山王ヨリ勧請ス（中略）源順卿能登守タリシ時國

府地主神タルヲ以テ國祭ヲ行フ是今ノ青柏祭ナリ」と記されている。718（養老2）年、能登が越前より独立し、近江日吉大社より勧請した山王社（現大地主神社）を創建する。青柏祭は981（天元4）年、能登の国司に着任した源順⁶が七尾湾の風景を賞愛し、京都及び江州勝地の名を移称して江州日吉大社に擬したことに始まる。七尾湾を近江の琵琶湖に模し、日吉大社、唐崎神社の祭礼山王祭に倣って行われたのである。青柏祭では現在も大地主神社に唐崎神社の神々を迎えて本儀が行われている。また、でか山の曳付之木遣唄には、「どっと曳き込む山王の庭へ 上の七社に また中七社 下の七社で 山王こめて 君の万歳 国家の繁栄 祝い奉れば 鶴亀さえも 翔けつ浮かびつ舞い遊ぶ」とある。この上中下の七社は比叡山山王二十一社を指すものであり、時代とともに変遷はあるが、その始まりは京都、江州の都ぶり、琵琶湖畔日吉大社、その摂社唐崎神社の山王祭に倣っていることを示している。七尾湾を琵琶湖に見立て、山王祭⁷を模した青柏祭は、江戸時代に入り七尾の都市作りに影響を及ぼしていると考えられる。

京都八坂神社の祇園祭の豪華な山鉾、近江日吉大社の山王祭の巨大神輿の両方の祭りから影響を受けて青柏祭の曳山が始まったと考えられ、七尾では現在も西が唐崎神社、東は大地主神社の東西の区間で青柏祭が行われている。青柏祭鉾山縁起に「爾來管領國主ノ尊敬祈願所タリ就中畠山管領職満則ノ治世ニ至リ魚町府中町鍛冶町ヲシテ營業役免除ノ恩典ヲ受ケ 加フルニ曳山ニハ畠山家ノ紋章ヲ付スルヲ免サル 今尚ホ表章シテ存スルモノ是ナリ 前田家ノ封國トナルヤ先規ヲ採用シ 更ニ魚町ニ漁業府中町ニ輸出入港鍛冶町ニ鍛冶業ト各專業ノ特典アル印物ヲ下付セラル 此制明治維新ニ至リ廃止ス 然ドモ曳山ハ依然トシテ今ニ旧儀ヲ持續シテ存セリ スク曳山ノ起因スルコト最モ遠ク且ツツケ町ハ專業權ヲ受ケシハ實ニ數百年ノ久シキニ涉レリ 往時町勢甚ダ盛ニシテ商工輸出入ノ繁盛ト共ニ庶民輻湊シテ市ヲナシ家屋從テ櫛比セリ 是即チ七尾町ノ誕生セシ所以ナリ」とあり、青柏祭には鉾山を運行した魚町は漁業、府中町には港での交易、鍛冶町は鍛冶業の專業權を三町が保証されたとされ、曳山行事が七尾の発展に寄与したと伝わる。

青柏祭の風流（でか山の曳行諸行事）の中心は高さ12m、重さ20tの日本最大の鉾山である。1806（文化3）年の由来書上に「畠山御城下江三ツ之山引備」、1892（明治25）年の取調帳には「鉾山ハ畠山家ノ治世ノ時」と記され、30年曳山新造の際に四百年來大曳山と宣伝されており、畠山治世時代から行われていたことがうかがえる。歴史的にでか山の変容は、文献上では「山」「曳山」「立物山」、明治期よりは「山鉾」「鉾山」「五月山車」などの記載があるが山王祭、祇園祭の山鉾の影響、風流の構造から「山鉾」の呼称に正当性があると思われる。さらに1717（享保

2) 年の能登紀行に30本の旗が並んだとあり、1862(文久2)年の曳山版画には17本の鉾などが立てられているとあり、でか山が京都祇園祭の鉾山を倣ったものであるとされる。また、1685(貞享2)年の寺社由来書上に「祭ハ如先規之毎年四月中之申日七尾府中村・鍛冶町・魚町 三つ之山莊、御国主様御祈禱相勤來申候」とある。その形状に関しては能州紀行に現在と同規模以上の風流の様子が記されている。1862(文久2)年の版画に高さ八間、車輪の直径六尺五寸、幅二尺二寸となり巨大化が進んでいる。しかし、明治40年の電線架設により六尺ほど切り下げられ、でか山上の旗、鉾などは立てられなくなり、その後電力会社の意向により鉾等が立てられない時代が続いたが、2008年より山鉾の本来の姿と意義を取り戻すため各町6本程度を駐車時には立てるようになった。また、でか山は輪島市黒崎町の黒島天領祭、輪島市門前町皆月山王祭の曳山、能都町宇出津曳山祭、内浦町白丸曳山祭、珠洲市鵜島曳山祭などに伝播したことがその形状から確認できる。

2020年、曳山保存会代表による協議の結果、曳山行事は全面的に中止された。しかし青柏祭本儀は大地主神社で執行された。地元住民が参集し、次回開催への決意を新たにした。規模を縮小して執行された神事には、例年の半数以下である七人の神職が助勤。拝殿への参列者も限定され、約30人が間隔を空けて着座した。五穀豊穡を願う青柏祭本儀では、祭主が祝詞を奏上し、参列した代表者が順に玉串を奉納した。本儀後拝殿の外の参道において、例年行われるでか山曳行の安全祈願と疫病から町を守る神事「道饗祭^{みちわさい}」も執行された。本来この神事では鍛冶町、府中町、魚町の三町のでか山が市街地を曳行され、この日に三基が神社前に勢ぞろいする。しかし、2020年はでか山の組み立て(山建て)、運行が中止となったため結界を開き、疫神を送るための「しめ縄切りの神事」は行われなかった。

道饗祭祝詞

掛麻久母綾爾畏伎大地主神社乃大前乎齋主遙爾拜美仕奉里
氏恐美恐美母白左久

此乃齋庭爾注連引廻志園奉齋火真白爾焼上芸祭場登祓比清
米氏海川野山乃味津物乎置座爾置高成志氏稱言竟奉良久波
毎年乃例乃隨爾今日乃生日乃足日爾廣庭母狹良爾曳供奉里
志福草乃三乃嚴鉾山往來乃道乃長路爾過津事無久障留事無
久八衢爾塞坐須塞大神等登神議議給比氏荒毘疎布留狂津神
乃狂津事無久各母各母本津所爾平介久安介久曳着志米給比又
大神乃敷坐世留御氏子乎始米七尾市乃諸人諸共爾天乃狂津
日登稱布留神云幸狂言爾相交古里相口會布事無久言排拂比
屋良比坐氏今母往先母病癘時氣乃煩無久平介久安介久有良
志米給閉登乞祈白須事乃篠篠乎御心和加爾所聞食氏守矜美
幸給閉登恐美恐美白須

2021年は前年同様保存会で市役所において協議を行い、でか山の山建は各町の任意とすることを確認した。鍛冶町、魚町は2020年と同様に中止を決定したが、府中町は組み立てて展示した。この決定に際し、府中町は府中町会連合会370戸に記名アンケートを実施し、議論の後山建のみを行い展示することを決定した。組み立てに関わる若衆100名を30名程度のグループに分け、新型コロナに対するPCR検査を行い陰性が確認できた者のみの参加が許された。なお例年の作業後の酒を介した寄り合いは禁止された。曳行ができないことが決定しているでか山の組み立てが行われたのは、山建の技法の伝承が途絶えることが危惧されたからであり、1か月を費やすこの組み立て作業を鍛冶町、魚町の若衆も見学した。

神事の変更を以下に示す。

<2020年>

- 5月1日 鍛冶町筵山清祓祭(大地主神社)中止
- 5月2日 神社紅葉川除祓式(唐崎神社紅葉川)4日執行
- 5月3日 大地主神社神輿渡御氏子各町でか山三台・人形清祓九体(山車前、人形宿)中止
鍛冶町曳出清祓祭(鍛冶町)中止
能登生國玉比古神社魚町御籠潔斎安全祈願祭(能登生國玉比古神社)中止
- 5月4日 府中町曳出清祓祭(印鑰神社)中止
青柏祭本儀(大地主神社)執行
注連縄切り神事 中止
道饗祭(大地主神社) 執行
- 5月5日 鍛冶町曳出清祓祭(大地主神社)中止
府中町鉾山奉幣祭(印鑰神社・七尾港)中止
府中町曳山曳込祭(印鑰神社)中止
- 5月6日 青柏祭終了奉告祭(大地主神社)中止

<2021年>

- 5月1日 鍛冶町筵山清祓祭(大地主神社)中止
- 5月2日 神社紅葉川除祓式(唐崎神社紅葉川)執行
- 5月3日 大地主神社神輿渡御氏子各町でか山三台・人形清祓九体(山車前、人形宿)府中町のみ4日執行
鍛冶町曳出清祓祭(鍛冶町)中止
能登生國玉比古神社魚町御籠潔斎安全祈願祭(能登生國玉比古神社)中止
- 5月4日 府中町曳出清祓祭(印鑰神社)中止
青柏祭本儀(大地主神社)執行
注連縄切り神事 執行
道饗祭(大地主神社) 執行

* 例年3日に執行される神輿の渡御、曳山と人形の清祓は、4日の本儀、道饗祭の後出御し行われた。また御祓川にて祭員7名による大祓の儀を執行した。

- 5月5日 鍛冶町曳出清祓祭（大地主神社）中止
府中町鉾山奉幣祭（印鑰神社・七尾港）中止
府中町曳山曳込祭（印鑰神社）中止
5月6日 青柏祭終了奉告祭（大地主神社）執行

3-2 七尾祇園祭の風流

灯火の風流は松明風流、灯籠風流、提灯風流に分けられる。キリコ祭りの風流は灯籠風流の一つであり、京の盆灯籠から北上し能登を起点として日本海側の各地を経由し、津軽へと形を変えながら広範に伝播したと考えられる。分布にはその中心となる地があり、その形の発祥となって周辺に広がったのである。キリコ（切籠）は巨大な角灯籠であり、口能登の内浦ではホウトウ（奉燈）、外浦ではオアカシ（御明かし）と呼ばれる。地域により提灯棚、囃台が付けられ、彫刻、漆塗、箔押などの装飾が施され豪華を競い合う。

疫神の祭に伴う風流の流行は能登半島においてはキリコ祭りとして広がる。全盛期には能登半島の200か所、担ぎ出されるキリコは1300基（現在650程度）を数えたとされる。国の選択無形民俗文化財に指定されている鳳珠郡能登町宇出津の八坂神社の祇園祭「あばれ祭り」では、1836（天保7）年寺社奉行の許可による難病除神事が行われてきた。この難病は泥棒風邪とよばれ死者が続出したため、宇出津の十村（大庄屋）桜井源五がこれを憂い、京都祇園社から牛頭天王を勧請して祭りを始めたと言われる。この時、大蜂が現れ住民を刺し、泥棒風邪が快癒した。「大泥棒、蜂やさいた（蜂が刺した）」と囃子回ったところ悪疫が絶滅したとの伝説が残る。疫病の流行の後の風流の発展と物語としての意味づけがみられるのである。

七尾祇園祭は大地主神社（天王社）の夏祭り（お涼み祭り）で7月第2土曜日に行われる。京都祇園祭の八坂神社を勧請し、祇園牛頭天王社と称した。例年6月14日（明治の改暦により7月14日）に祇園会を行ったことが起源とされる。牛頭天王社は能登畠山家の七尾城落城の折兵火にあったが、1578（天正6）年の棟札が現存する。1635（寛永12）年、府中村山王森山王神社境内に遷座し、1882（明治15）年、山王社、天王社が大地主神社として合祀された。祇園祭1ヵ月前、神社社務所に奉燈を奉納する11町の各町会長、氏子総代、指揮者（祇園祭継承実行委員会）、大地主神社山王奉賛会会員が寄り合い「籤取式」が行われ、宮入の順序、神輿担ぎ入れ係り町、祭りの中締め「七尾まだら」⁽⁸⁾の先導役などが決められる。祭り前日夕刻、各町指揮者が社参し、指揮者会議を行い最終の打ち合わせが行われる。またこれに先立ち、当日奉燈に乗り込む各町の囃し手の子ども達約120名が参加し、安全祈願祭と太鼓、鉦、笛による奉燈囃子の奉納が行われる。

祭礼当日午後3時頃、各町の幼児を含む子供たちと親達

による祭りの前触れ「ヤッソーヤッサ」が行われる。竹棒をロープでつなぎ電車ごっこの要領でヤッソーヤッサと掛け声とともに一斗缶を棒で打ち鳴らしながら子どもたちが行進する。この祭礼は祇園会に始まり、諸行事（風流）が導入されることにより七尾祇園祭となったのである。この地域は海拔0m地帯であり、大潮などによる水災害が多く、これに伴う疫病への防疫、厄除けを願う意味がある。午後3時過ぎ、大地主神社山王奉賛会40名により神輿の出御祭が執行される。その後、氏子区域の女子を中心とした子供たちによる「奉燈音頭踊り」を先導に湊町の仮宮へ神輿の渡御が行われる。1940年代までは「府中村踊り」が行われていた。それまで奉燈に乗ることが許されるのは女兒に扮した男児に限られ、女兒はこの踊りをもって参加していたが、少子化の影響により現在は囃子手として奉燈に乗り込むことが許されている。また奉燈音頭踊りへの参加も男女の区別はない。

夕刻、11町の奉燈はそれぞれ担ぎ出され、花（ご祝儀）を集めながらそれぞれの町内を練りまわる。午後8時過ぎ仮宮前に勢揃いする。仮宮前での競い合い、乱舞の前後、各奉燈は清祓式、奉納祭が執り行われ、各町に御幣と指揮者の襷が授与される。御幣は奉燈高部欄上に備えられる。「ヤッソーヤッサ」により打ち起こされた疫神を奉燈に依代として招き寄せ、湊町の仮宮に運び、海へ流す。仮宮の神輿前では祇園祭本儀（神事）が執行される。この際斎主が奏上する祇園祭本儀祝詞は、祇園祭の主祭神建速素戔鳴尊の八岐大蛇の退治にまつわる神話を述べ、この祭りに各町より担ぎ出される奉燈（百千万乃燈）を奉納して建速素戔鳴尊を讃える内容である。奉燈が仮宮前に揃うと2016（平成28）年より一撃花火と称する打ち上げ花火が100発上げられ、祇園祭本儀の神事、神楽、修祓、祝詞奏上、玉串奉奠、神楽が執り行われる。儀式が終了すると各町の奉燈は予め籤取式で定められた順に神輿を先導して大地主神社に向かう。神社に到着する11時頃から各町の奉燈は籤順に従って境内に焚かれた篝火の周りを担ぎまわる。この回数は、終了時間を考慮して4周までと定められている。この篝火を回り乱舞する様を「あばれ」と称し、あばれの後所定の場所に落ち着く。その後、奉燈から神々の招代の御幣が高部から外され、指揮者の襷とともに拝殿に返還される。神輿は神社から仮宮、仮宮から神社までは奉賛会会員により台車にて曳かれてきたが、宮入では籤取式で決められた町の若衆により担がれ、「チョーサーチョーサー：能矢先」の掛け声のもと拝殿前に移される。その後、神璽が神輿から本殿へ還御され還御祭が行われる。神事後、籤で決められた町内による先導で神社に集った約500名により「七尾まだら」が合唱される。七尾祇園祭の奉燈祭りは担ぎ出される基数の増減、大型化、担ぎ方・囃し方コンテストなどの変遷があり、

現在、若衆たちからの寄付による打ち上げ花火の実施、神輿の宮入儀式の厳粛化などが行われるようになった。これは若衆たちによる祇園祭継承実行委員会の立ち上げによる情報、問題点の共有化によるものであり、その結果観光客などの見物者が増加し、祭りは隆昌化している。

祇園祭本儀祝詞

掛卷久母畏伎大地主神社登称辞竟奉留建速素戔鳴尊乃宇豆乃大前尔仕奉留斎主齋回里清回里額突奉里氏畏畏美白左久 言波久母畏加礼抒大神波神性建久雄々志久座久氏千早振神代乃昔根乃堅州国尔出坐左牟登志氏 出雲乃国奈留鳥上乃地尔至里坐氏荒根八岐大蛇乎切屠坐氏 顯世乃妨害乎拂比除伎給比須賀乃地尔到里坐氏 我心清々志登宣給比即氏御殿乎見立氏氏櫛名田比壳登住坐給比八雲立乃御歌乎詠給比伎 又彼乃八岐大蛇与里得給比志天叢雲劍波最母奇伎神劍奈礼婆我賀元尔保倍伎物尔波不在自登宣給比氏即天照皇大御神乃御元尔參上里氏献良志米給比伎故此乃奇指支伎神劍波即氏天日嗣乃三種乃神寶尔支氏実尔貴伎神寶加母如此大伎功支久座坐計里 威徳乎崇米敬比奉里功績乎偲思尊美奉里氏何時波雖在七月十四日乃今日乎生日乃足日登齋定米氏毎年乃例乃随尔御祭仕奉留我故尔礼代乃幣帛乎置座尔置高成捧奉氏氏子乃町々与里百万乃燈乎大神乃稜威登輝志大前母狭良尔置足良波志氏老母若伎母雄々志久勇志久掌母亮良尔拍上拜美仕奉留状乎御心宇良宜尔聞食給比此久仕奉留御氏子乃人等乎広久厚久守里給比恵給比氏心御穩尔身健尔家内安久産業豊介久各母各母弥賑尔賑毘氏生乃子乃八十統伎尔至留麻伝弥栄尔栄志米給開登恐美恐美母白須

2020年の七尾祇園祭の奉燈行事は中止となったが、神輿の渡御は例年に倣い湊町一丁目を御旅所として曳き出され、神事のみが各町の代表が参加して執行された。この折、例年通り各町より町名入り高張提灯が奉納されたが、子ども奉燈音頭踊りの先導は行われなかった。また近年、継承実行委員会の寄付により百発程度を短時間に打ち上げる「一撃花火」も中止となった。

2021年、七尾祇園祭の他、能登各地のキリコ祭りは6月末日現在、中止、神事のみを予定している祭りがほとんどである。七尾祇園祭は2020年と同様神事のみが執行されたが、風流は若衆により組織される継承実行委員会が各町に奉燈の実施に関するアンケート調査を行い、すべての町内で実施の明年への見送りが主張され中止が決定された。奉燈（キリコ）担ぎによる密集はコロナの感染の危険性が高いと判断されたのである。担ぎ手の多くが町外から手伝い（テッター）であり、職場からの理解を得ることが困難であることであった。

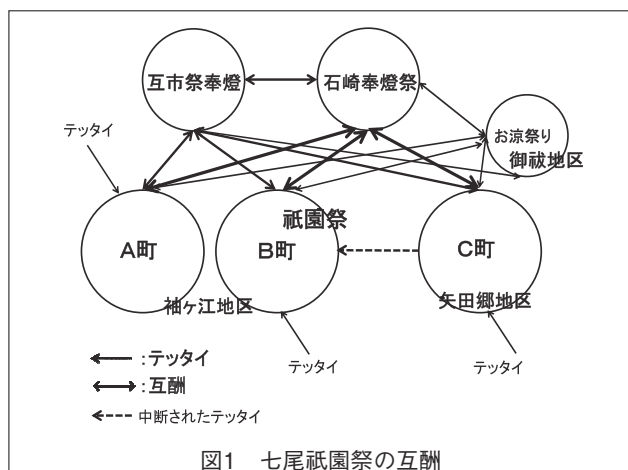
奉燈が奉納される大地主神社は、明治時代に山王社と天

王社の二社が合祀された歴史を持つ。祇園祭は本来袖ヶ江地区の天王社の祭りであり、山王社の氏子区域矢田郷地区は参加してこなかった。しかし、山王社と天王社の区別は氏子内で意識されることは少なくなり、山王社氏子の山王町、上府中町、本府中町がそれぞれ奉燈を持つようになった。それまで山王、上府中、本府中町は、袖ヶ江地区のテッターとして参加してきたが、中心的テッターを失うこととなった。さらに中心市街地である袖ヶ江地区の人口減少の影響により担ぎ手は地元住民のみでは対応が困難となり、外部からの担ぎ手は広範になっている。例えばA町では同じ袖ヶ江地区内の印鑰神社互市祭（7月第1土曜日）の氏子地域をはじめ、能登生国玉比古神社お涼み祭（7月最終土曜日）、石崎地区の石崎奉燈祭などから多くの担ぎ手が参加している。そして互酬として互市祭、お涼み祭、石崎奉燈祭へ手伝いに出向いている。（図1）更に金沢市、近隣地域などから職場、大学などの社縁により担ぎ手を確保する傾向がある。互市祭、西のお涼み祭、石崎奉燈祭もこのような担ぎ手の確保の傾向が年毎に強くなっており、これらの奉燈祭りは維持継承のために互酬、手伝いが絶対条件となっている。元々能登半島には労働の互酬「結（エー）」⁹⁾の社会制度、文化があり、祭りでの担ぎ手の貸し借りが成立する背景がある。各キリコ祭りの担ぎ手はそれぞれ互助により成り立っており、一つの祭りの中止は、全体の中止につながるのである。

熊沢栄二らの「奥能登珠洲市のキリコ祭り衰退に関する調査報告」によれば、衰退の社会基盤変化因として電線の架設に伴うキリコの小型化による祭礼規模の縮小化、護岸工事によりきびしい巡行が無くなり車輪をつけるなどの改良がおこなわれ、面白みを失い担ぎ手の減少を招いたこと。また道路の開通により近隣とのネットワークが構築されたが、都市への人口流出が促され、担ぎ手が減少し、帰省者の割合が増え、これにより日程が変更されて神事としての重要性が希薄化したこと。更に就労形態変化因として、女性の参加や帰省者対応としての祭の日程変更は参加者の構成を変化させ、祭に対する関心度は低下し、女性や観光客の参加を容認し、簡素化されて神事の意義（疫神の祓い）を見失い衰退を招く結果となったこと。加えて祭りのヨバレ¹⁰⁾の習慣も各家庭で準備された料理は仕出しとなり、簡素化が進んだことをあげている。これらの結果から奥能登のキリコ祭は「社会基盤の変化」が、伝統的な祭礼の構成要素に影響し、若者の都市部への流動化を助長。次に「祭礼関心の低下」による衰退は、地域文化への関心の低下により人口減少地域の将来の担い手のへの深刻な不安があり、人口維持地域では祭礼のイベント化による伝統継承の焦りが見られる。「合理化」による衰退に対しては、人口減少による労力や資本の縮小が避けられない以上全て

の祭礼文化を維持することは現実的ではないとしている。

本調査研究では、各キリコ祭りに程度の違いはあるが、全てのキリコ祭りに同様の衰退傾向がみられた。最も勇壮と称される石崎奉燈祭、組織改革により隆昌化が見られる七尾祇園祭においても、担ぎ手の手伝いや互酬の比率は大きくなりつつあり、キリコの小型化、隔年開催、地域限定開催などが検討されている。さらに人口減少の著しい奥能登などは深刻である。



4 アフターコロナの風流

上下水道が不備の近世都市において、水を介した疫病の蔓延は必然であった。したがって除疫を願う祭りの風流の流行は、為政者による都市繁栄の政策であった。また、風流が「見る一見られる」の関係から発展したことは、民衆のアイデンティティの確立の観点から重要であった。

現代社会における高度経済成長期の経済効率の追求や当初、文部省が主導した新生活運動は、冠婚葬祭の合理化と迷信やしきたりの打破、祭りの衰退に影響したと考えられている。新生活運動は婚姻習俗や葬送習俗の簡素化、因習と捉えられていたものの廃止、祭礼期日の統一、衣・食・住生活の改善、村落集会運営の見直しをはじめ、民俗に直接かかわることが多かったのである。この運動は各地の伝承生活を直に壊すかたちで推進されていったのであり、そのため各地に急激な祭りを含む民俗変化が生じ始めたのであろう。そしてコロナ禍における祭礼や冠婚葬祭の簡素化は、この高度経済成長前期の衰退とは性格が異なり、高度経済成長後期に復興した祭りを実施する縁そのものの崩壊を助長することが懸念される。過疎化、少子化が著しい地域社会ではコミュニティーの希薄化が進み、祭りの衰退は決定的打撃を与える可能性がある。

青柏祭の曳山行事はこれまでもその継承に幾度となく危機があった。特に七尾町は明治28年と明治38年に千戸を焼失する大火にみまわれる。明治38年の焼失戸数は991戸で全焼718棟、半焼4棟、全潰1棟、その他建物全焼40棟、こ

の時鹿島郡役所・七尾郵便局・税務署・執達吏役場・七尾町立商業学校・町立尋常小学校・神宮奉賛会支部・宝幢寺・光徳寺・大谷派教務所・能登銀行・七尾銀行、多数の料理店、旅館、酒蔵、菓子屋、多くの土蔵、商店、また橋梁、舟まで焼失する壊滅的な被害であった。この時、明治天皇より御救恤記金壹千円が下賜されている。この被害地域は魚町、府中町の曳山の中心地域であり、曳山行事は到底に困難と考えられた。しかし、明治40年には復興させ魚町、府中町ともにでか山を曳き出す。また大火の翌年の39年には鍛冶町が単独で曳き出されている。現代においても2007年3月の能登地震や2011年の東日本大震災にもでか山は曳き出された。曳山三町は鍛冶が鍛冶屋の集合町、府中町は港湾労働者、魚町が漁業の町であり、各町その生産性を維持向上させる機能を持っていたと考えられる。しかし現在鍛冶屋は一軒も存在せず、港湾労働者、漁業者も姿を消している。従って曳山の組織は、生産性の向上の機能を持つギルド的労働組織の単位から祭りと地域に愛着を持つ者による約縁集団へと変容しているのである。

風流が衰退する理由の一つは必要以上の華美化による経費の不足である。でか山においては、民衆の祭りとして民衆が経費を負担してきたことに継承の鍵があった。しかし現在は公の補助金に依存する比率が徐々に多くなりつつあり、またそれを是とする風潮がある。祭りの文化化、観光化、健全化による公への依存度の高まりは、これに伴う自由度の喪失を意味している。それは風流の本質であるところの思いつき、閃き、創意工夫を停滞させ、魅力を奪うことにつながるのではないだろうか。また山建の技法（藤絡技法等）、曳行技法（辻回し）などの専門性の高さは人々の祭りへの動機づけに役立つ反面、継承の困難度を高める事になるともいえる。コロナ禍による曳山行事の中止は公の意向を慮ることによる因子が大きく、諸技術を途絶えさせて衰退、消滅とつながる危険性を持つといえよう。

各キリコ祭りは少子化と過疎化を原因として、これまでも衰退傾向がみられていた。最も勇壮と称される石崎奉燈祭、組織改革により隆昌化が見られる七尾祇園祭においても、担ぎ手の手伝いや互酬の比率は大きくなりつつあり、キリコの小型化、隔年開催、地域限定開催などが検討されている。さらに人口減少の著しい奥能登地区などは深刻である。一方、キリコ祭りの遊戯性の視点からキリコ担ぎの楽しみ面白みが、担ぎ手の不足により身体的苦痛にかわっている現状は無視できない。適正な人数で担ぎ、いわゆる乱舞でできれば陶酔感と達成感が喚起され例年のキリコ担ぎを楽しみとすることができる。しかし我々のフィールド調査においては、人数が不足し始めると急激にキリコが動かせなくなり、楽しさは消えて苦しくなり始めたとの声が聞かれた。この「キリコ担ぎの楽しさの低下」はキリコ祭り

の衰退の最大の問題であった。コロナ禍によるキリコ祭りの中止は、過疎地域にどのような影響を及ぼすのであろうか。難行苦行からの解放と捉えられるのであろうか。文化化され観光資源としての意味を持つキリコ祭りと、地域住民による地域のためのキリコ祭りではその将来に違いが生

まれるのではないだろうか。森田三郎が指摘した祭りの意義である「集団集約」と「アイデンティティ確認欲求の充足」を満たすことができるか否かが、継承の鍵であると思われる。2022年以降の祭りの動向を追跡調査することで風流の変容を明らかにし、課題解決の一助としたい。

注

- (1) 平安時代から行なわれた芸能。田植えの時に田の神をまつため笛・太鼓を鳴らして田の畔で歌い舞った田舞に始まる。やがて専門の田楽法師が生まれ、腰鼓・笛・銅鉦子（どびょうし）・編木（びんざさら）などの楽器を用いた群舞と、高足（たかあし）に乗り、品玉を使い、刀剣を投げ渡しなどする曲芸とを本芸とした。鎌倉時代から室町時代にかけて田楽能を生んで盛んに流行し、本座・新座などの座を形成し、猿楽（さるがく）と影響があった。のちに衰え、現在は種々のものが民俗芸能として各地に残っている。
- (2) 昭和30年に設立された新生活運動協会（財団法人新生活運動協会）が主体となり、中央の関係団体、各都道府県さらには各市町村の関係団体と協力しつつ運動は推進された。資金は、発足当初は文部省、昭和31年度からは総理府の予算のなかから助成されていた。運動がある程度浸透した昭和34年度の新生活運動に関する世論調査の結果では、「新生活運動について、もっとこんなところに力を入れたらよい」というようなご意見があればおきかせください」という質問に対し、三分の二は「不明」という結果であり、運動に対してまだ理解不足な人々が大多数を占めていたが、冠婚葬祭の合理化、経済生活の合理化、蚊やハエの撲滅など環境衛生の改善と虚礼の廃止を目的とし、迷信や古いしきたりの打破、教養の向上、食生活の改善、台所・カマドの改善、健全娯楽の普及や風紀の浄化、共同施設の拡充整備、時間の励行、地域社会の民主化、生産の向上、家庭生活の民主化、公衆道徳の高揚、衣生活の改善、貯蓄の励行などに効果があったと考えられている。
- (3) 共通の目的・関心を満たすために、一定の約束のもとに、基本的には平等な資格で、自発的に加入した成員によって運営される、生計を目的としない私的な集団。
- (4) 六国史の一つ。文徳実録に続く勅撰の歴史書。清和、陽成、光孝の三天皇の時代30年を収めた編年体の実録。宇多天皇の勅を奉じて、藤原時平、菅原道真、大蔵善行らが編纂を開始、中断ののち醍醐天皇の勅により完成した。『坂本太郎著『六国史』（1970・吉川弘文館）』
- (5) 小山の上に木を一本植える形をとり、この山と木の組み合わせは神に占められる依り代の姿を示す。
- (6) 三十六歌仙の一人。和泉守・能登守。梨壺の五人の一人として後撰集の撰進、万葉集の訓読にあたった。倭名類聚鈔、源順集。
- (7) 4月12、13日（旧暦4月の中の午と未の日）、山の神をむかえる儀式が形を変えて残ったものとされる。4月14日申の日の大宮の祭りは山王七社の神事、七社の神輿が湖上に出て唐崎の沖で粟津の御供をうける儀式である。10世紀末には山王祭の主要な祭祀となった。
- (8) 船方（船乗り）の祝儀唄として漁港を中心に各地に伝えられた。ほとんど合唱で歌うところにこの唄の特徴である。「まだら」の名は、佐賀県の唐津と壱岐を結ぶ玄界灘に「馬渡島」があり、この島に発生した船乗り唄の「まだら」が船便によって日本海沿岸を北上し伝えられたという説がある。また、仏教の「曼陀羅」が起源との説もある。柳田国男は「まだら」は所々の漁村の晴衣を意味するとした。

- (9) 地域社会内の家相互間で行われる対等的労力交換、相互扶助。農山村で盛んであり、現在も田植、稲刈りなどで行われている。結における労力交換では、働き手として出勤する個人の労働力の強弱はあまり問題とはされないが、一人前の人間が1日提供してくれた労力に対しては、かならず1日の労働で返済することが基本で、金銭や物で相殺することを許されない。
- (10) 祭りの日に親戚や友人らを多数自宅に招いて、ごちそうでもてなす習慣をヨバレと呼ぶ。能登では祭りに招かれることを「呼ばれる」と言い、それが語源とされる。祭礼の日、集落の家々の玄関や窓が開け放たれ、誰でも出入りできるようになっており、祝いの席では、「ごっつお」と呼ぶ煮物などの家庭料理を食べながら、キリコが練る光景を見物する。

参考文献

- 阿南 透（2018）「高度経済成長期における都市祭礼の衰退と復活」
国立歴史民俗博物館研究報告 第207集
植木行宣・福原敏男（2016）山・鉦・屋台行事、岩田書院、pp.10-140
山・鉦・屋台の祭り研究事典（2021）思文閣出版
大森重宜（2012）「七尾祇園祭にみる能登の民族スポーツ「キリコ祭り」」金沢星稜大学人間科学研究6（1）、pp.45-50
（2019）身体運動文化としての「山・鉦・屋台行事」：能登半島における早稲田大学博士論文
祭のスポーツ人類学的研究
小川直之（2014）「依代」の比較研究、国際常民文化研究叢書7、pp.349-368
折口信夫（2002）古代研究Ⅰ祭りの発生、中央公論社、pp.160-207
折口信夫全集ノート編第五巻、中央公論社、pp.13-88
加藤隆久 土肥 誠 本澤雅史（2015）祝詞用語用例辞典、戎光祥出版
九学会連合能登調査委員会（1989）能登・自然・文化・社会、平凡社
熊澤 栄二（2011）「奥能登珠洲における地域づくりに向けた祭礼の衰退原因の分析」ランドスケープ研究74（5）pp. 667-672
藪田稔（1975）「祭の盛衰と構造変化」國學院大学日本文化研究所紀要35、pp.159-194
堀 一郎（2013）聖と俗の葛藤、平凡社
福田アジオ（2009）日本の民俗学、吉川弘文館
三宅邦吉（1977）能登畠山史要、凸版印刷、pp.1-17
森田三郎（1990）祭りの文化人類学、世界思想社
森田 玲（2016）日本の祭りとは神賑、創元社
柳田国男（1971）定本柳田国男集第十巻、筑摩書房、pp.159-284 pp.182-189
吉田龍司（2010）「伝統的祭礼の維持問題岸和田だんじり祭における曳き手の周流と祭礼文化圏」龍谷大学社会学部紀要37、pp.28-42
米山俊直（1986）都市と祭りの人類学、河出書房新社